「不安」から照らす「生」の諸相

×

真壁茂夫（舞台演出家）

― ことば・こころ・肉体… ―

戦争、病い、不況、災害など、社会事象や自然現象による「不安」は、人にさまざまな表現をもたらしてきました。

「不安」は、われわれの「生」の感覚を揺るがします。それゆえ、「不安」に基づく 表現を追究することは、同時に「生」の諸相をあぶり出すことにもなるのだろうと考え ます。自身を取り巻く不安な事象を、人はどのように内面化し、相対化し、また、乗りこえてゆこうとするのでしょう。その際の表現行為は、人にどのような意味や力をもたらすのでしょうか。

10 月 21 日（土）の学術講演会では、劇団「OM-2」を主宰し、舞台演出家として活動する真壁茂夫氏をお招きし、小作品「paper song」上演のあと、「不安」と「生」についてお話を伺います。劇団「OM-2」は、人間存在の「不安」、そして「生」の根源的な基盤となっている「肉体」について常に舞台において問題化しており、その「肉体」による表現の強度は観る者に大きな衝撃を与えます。

本展示は、真壁茂夫氏の作品や著作を媒介として、「不安と生の研究会」メンバーがそれぞれの専門領域において、「不安と生」そして「肉体」という問題について考えを巡らせたものになります。こうした根源的な問題に対してご覧いただく方々の想念を揺り動かし、考えを深める機会になれば幸いです。

なお、「真壁茂夫さんに聞いてみたいこと」や「この展示に関する感想」を、ご意見票にお書きくださり、展示スペース内の専用箱にお寄せください。ここで掲示をさせていただきますのとともに、10 月 21 日(土)、真壁さんご本人にお答えいただきます。また、当日ご紹介できなかったご意見につきましても、真壁さんにお届けいたします。ぜひ、ご参加ください。

2017 年 10 月

不安と生の研究会

身体が語るもの――平和と繁栄の戦後日本社会のなかで

若松伸哉（国語国文学科）

♠ 戦中と戦後にあらわれた身体

日本では民間人を含めておよそ 300 万人が犠牲になったと言われる第二次世界大戦のあと、終戦直後の混乱期を経て、1950 年代から 1970 年代にかけて日本は高度成長期を迎える。大量の〈死〉の時代のあとに、〈平和と繁栄〉の時代が訪れたのである。

〈国民に死を命じる権力〉から〈国民を生かす権力〉へと転換した日本国家のあり方は、表面上は対照的なものでありながらも、国民の身体について決定的な共通項を強いてもいる。

戦争の時代には、国家の盾となり敵である他国の人間を殺害する兵隊として、国民の身体と心は規律的に改変させられたが、戦後の日本では、身を粉にして経済活動に励み、国家の繁栄に寄与する従順で規律的な労働者の身体と心が出現することになった。しかし、ともに目指されるのは〈国家に寄与する健康/健全な身体〉であった。

♠ 身体パフォーマーとしての三島由紀夫

三島由紀夫は戦後の日本文学史を語るうえで欠かすことのできない作家であり、まさに高度成長期を通じてスターであり続けたが、パフォーマティブに自らの鍛えられた肉体をメディアにさらしていった三島の振る舞いは、一つの身体論としても興味深い。貧弱な肉体へのコンプレックスから、〈健康/健全〉を求めて膨張していき、〈護国〉のイメージへと収斂していった三島の肉体は、戦後の身体のなかにあらわれた戦中の身体であり、隠されたその連続性を示すものだったと言えるのかもしれない。

1970 年 11 月 25 日の三島由紀夫の割腹自殺は、三島の最後の身体パフォーマンスであり、その健康的な肉体が内包していた死の夢をあらわにした。

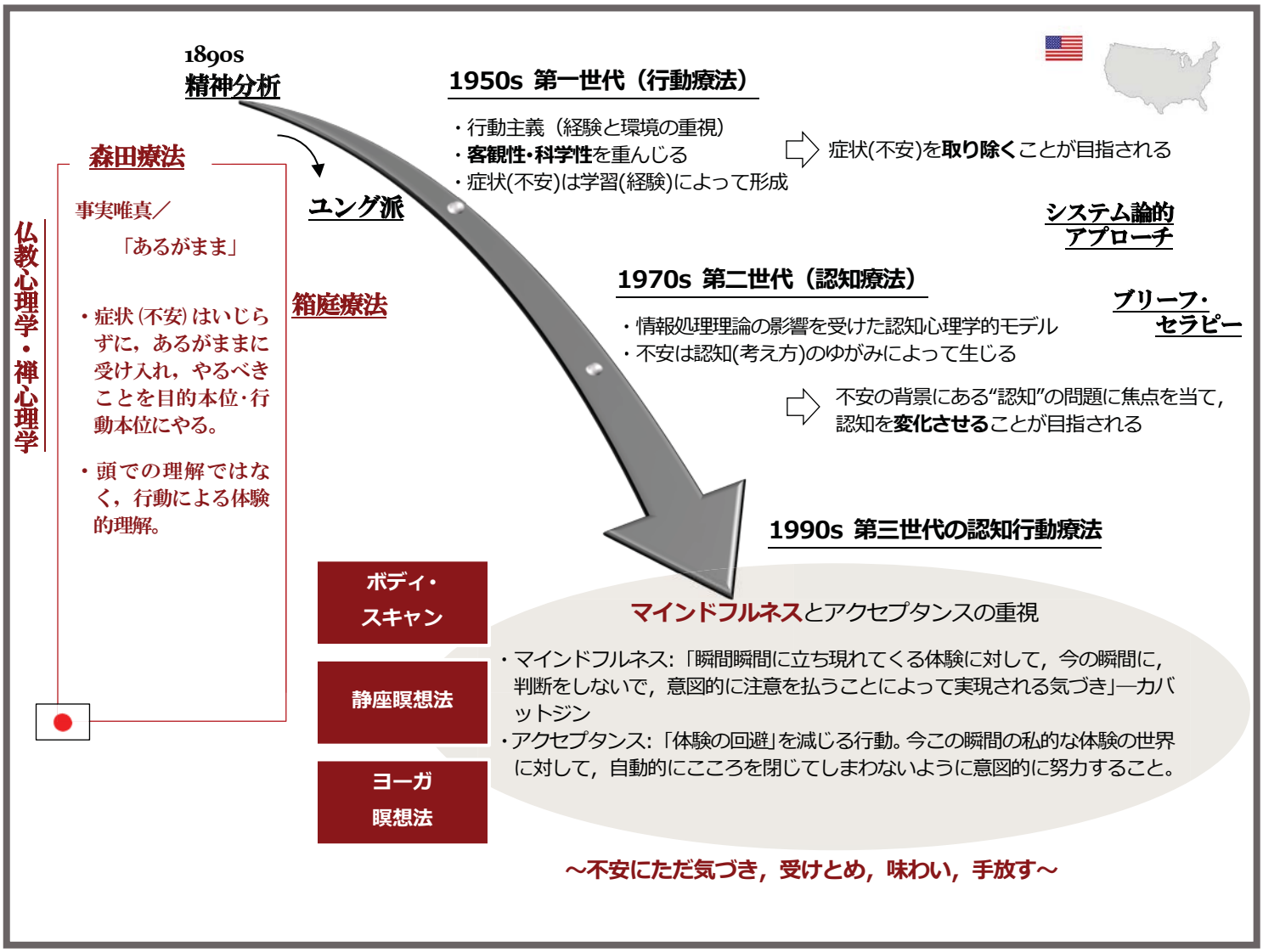
♠ 土方巽・寺山修司の表現する身体

三島由紀夫の友人だった暗黒舞踏家の土方巽、そして三島と交流のあった劇作家の寺山修司。この二人が描く身体はおよそ〈健康/健常〉な肉体とはほど遠いものだった。土方巽の暗黒舞踏は人間の肉体が孕む〈病・死〉を前面化し、見世物小屋の復権を謳った寺山修司の舞台・映画においては奇形とも言える人間の肉体が跋扈する。

彼らの描く異形の身体は、醜悪で猥雑ですらある。そして興味深いのは両者の表現のなかにはそれぞれの出身地である田舎（土方にとっては秋田、寺山にとっては青森）が大きなモチーフとなっている点である。国家の繁栄を担う〈健康/健常〉な労働者の身体は、高度成長期において都市部に流入していった。土方と寺山の描く異形の身体は、田舎の土俗とも絡みつつ、たしかに同時代の〈健康/健常〉な身体への批判的な視線を備えている。身体もまた語るのだ。

心理療法における「不安」―認知行動療法の時代的変遷を中心に―

田上　恭子（看護学部）



～真壁氏の著作『「核」からの視点』から臨床心理学を考える～

真壁氏の考える"演劇"

・「現在，演劇に必要なのは…(中略)…身体の方向から考える視点に移行することにある。」（p.26）
・「身体における〈入り口〉を見つけ出そうとするにはどうしたらいいのだろうか。ほとんどの宗教に，知的なことを学ぶだけではなく，座禅や読経など身体を伴って日々修行するものがあるのも…中略…知的作業以上の身体における可能性を信じたためなのである」（p.86）

真壁氏の考える"人間"

・「人間は己を覆い隠すことで，社会の中でうまく生活できる存在だ。」（p.13）
・「その病気を早く片付けてしまおうとか，上手く対処して問題が出ないようにしようとせずに，きちんと向き合おうとすることが必要なのである」（p.65）
・「〈内側〉とは，言語による思考以外のところのことであって，それは言葉では言い表せない」（p.69）
・「外側（のシステムなど）を変えたところで，自分の〈内側〉の基が変わるわけではない」（p.139）
・「人間は常に不安や恐怖から解放されることを望んできたのかもしれないが，考え方を変えれば，その不安や恐怖こそが人間を人間らしく（本質に近づき）生きさせようとしてきたのかもしれないのである」（p.146）

日本の心理学や心理療法は，一部で独自の発展を遂げながらも，欧米での新たな知見や方法をいかに取り入れるか，欧米にいかに追いつくかに傾注してきたきらいがある。特に昨今，社会的情勢の影響もあってか，米国の効率主義的な心理療法（短期間で目に見える変化を生じさせることを目指す）が最善のアプローチであるという考えが臨床心理学において主流となってきつつあるように感じられる。

そのような中，米国において禅やヨーガなどの東洋思想を取り入れたマインドフルネスが注目されるようになった。わが国は，ある種逆輸入的とも考えられるが，無論それを導入し，社会的ブームといわれるほど急激に関心が高まっている現況である。確かに"不安とどう向き合うか"という点で，マインドフルネスはわが国に馴染みやすい方法や考え方であるかもしれない。しかしながら，どれだけマインドフルネスの本質や意味について考えられているのだろうか。

身体、芸術、そして社会

-コンテンポラリーアートと後期近代の不安と生-

藤原　智也
（教育福祉学部 教育発達学科）

❑ アートにおける身体と視覚

西洋以外の地域で、芸術に相当する営みはどのような場面で見られるだろうか。広く世界的に観察できるのは、お祭りである。そこでは造形や音楽や物語といった芸術が総合的に組み合わさって機能している。また、日本では造形美術が生活の中に未分化なかたちで埋め込まれていた。屏風絵は広間を仕切るパテーションとして使われていたし、襖絵や掛け軸は室内空間の壁面を豊かにするものであった。そのような空間へ庭から虫や鳥の声が聴こえ、人々が俳句や和歌などを読むというのが日本にあった芸術の営みである。そこにあるのは視覚や聴覚に限定されない総合的な「身体」経験である。

西洋では芸術を、美術、音楽、文学といったような領域として区分してきた。これは、一種の分業体制のようなものだ。その背景に、西洋では、言語を介して普遍性に接近しようとする思考（ギリシア哲学、ユダヤ・キリスト教）が発生したことがある。さらに、分業化された芸術の領域間で、普遍性への近さを措定してヒエラルキーをつくるということもしてきた。例えば、美術は音楽や文学より劣り、美術の中でも彫刻は絵画に劣るといった具合だ。とりわけ美術では、純粋な「視覚」経験こそが美術の問題だと長らく考えられてきた。しかし、人類史において、タブローと額縁によって時間と空間を断絶する絵画のような表現形式は、西洋近代に特異的なものである。

❑ コンテンポラリーアートにおける身体

視覚に限定した芸術としての絵画の表現方法を追求してきた西洋美術は、20世紀半ばになると飽和状態に陥り、新しい表現方法が生まれなくなってしまった。近世の写実的な具象絵画から、近代の抽象絵画へと至ったのち、【絵画以後】の時代を迎える。そこではアクションペインティング、パフォーマンスアート、インスタレーションなどがコンテンポラリーアート（同時代の芸術、現代アート）として登場した。これらの特徴は、芸術が「視覚」経験から「身体」経験へと意識的に拡張されたことであり、その中から近代社会へ肉薄する強い批評性を帯びた作品も登場してきた。

M.アブラモヴィッチの《Rhythm0》は、パフォーマンスアートにおけるその典型例である。彼女は展示会場で自らの身体を差し出し、観客に対して机の上に置かれた様々な道具によって彼女自身に働きかけるように促した。最初は遠巻きに見る人が多かったものの、その後に観客たちは道具を使って彼女の服を切り裂き、首元にナイフを這わし、様々な性的暴行を行った。アブラモヴィッチは、「ステージさえ提供されれば、大部分の『正常な』人間は、暴力的になる可能性がありうる」と語っている。ここには、近代社会は理性を持った市民たちによって営まれているのだというフィクションへの鋭い批判があり、人間から切り離せない無意識や潜在的な野生が身をもって示された。しかし、それを剥き出しにすることは、安定的な近代社会を不安定化することにほかならない。

M.アブラモヴィッチ（1974）《Rhythm0》

❑ 後期近代と身体を通した社会造形

近代社会では、実生活の基盤となる地域社会というローカルな範囲を超えて、行政や市場といったシステムが機能している。行政や市場は、市民の合意によって作動しているはずであるが、それが人々の望まないかたちで社会を形成していることがありうる。まちづくり、教育、サービス業など、マニュアルに則った画一化により人間味を失ったコミュニケーションが生活を埋め尽くす。

J.ボイスの《樫の木プロジェクト》は、放っておいてはコンクリート、アスファルト、金属、プラスティックによって埋め尽くされゆく我々の生活環境を、アートによって造形しようとする試みである。そこでは地域住民との熟議を経て、ボイスと彼らによってまちに7000本の樫の木が植えられた。この営みには、システムが優位となった後期近代において、ローカルな範囲における身体を介した共同性から社会をかたちづくっていこうという意図がある。行政や市場といったシステムが野放図であれば、多様性なき入れ替え可能な生への不安を引き受けなければならないが、ボイスの取り組みはそれへの抗いでもある。これらのコンテンポラリーアートは、個と社会の間にある生と不安の問題を、「身体」経験を媒介として投げかけている。

J.ボイス （1982-87）《樫の木プロジェクト》

ファッションとアートの接近

原　潮巳（外国語学部）

ファッション・デザイナーの「不安」

ファッション産業は 20 世紀を通して世界的規模の発展を遂げ、その結果デザイナー達の地位は飛躍的に上昇した。メトロポリタン美術館では有名デザイナーの特別展が毎年開催され、今年はコム・デ・ギャルソンの川久保（1942-）が取り上げられた。

だが彼らの多くは、大文字の「アート」に対するある種の対抗意識／コンプレックスを相変わらず抱えているように思われる。シャネル／フェンディのラガーフェルド（1938-）は、世界のファッション界の帝王として君臨する一方、写真家としても精力的に活動している。

他方、大衆性を獲得し難いコンテンポラリー・アートの側からは、ファッションに接近することで知名度と経済的成功を求める者も現れる。「キッチュ」のアーティスト、クーンズ（1955-）とルイ・ヴィトンの「コラボ」は、そうした状況についてのセルフ・パロディとも解釈出来よう。

ファッション・デザイナーはアーティストたり得るのか？

アーティストである必要があるのか？

◆　ハイカルチャーへの接近

ファッション・デザイナーは、マリー＝アントワネットの「モード大臣」ローズ・ベルタン（1747-1813）のような例外もあったが、19 世紀半ばにウォルト（1825-1895）が登場するまでは、単なる職人としての無名の存在に過ぎなかった。これに対抗するかのように、ドゥーセ（1853-1929）はシュルレアリスト達の協力の下で貴重書を収集、サン＝ローラン（1936-2008）も自宅に膨大な美術品をコレクションし、ハイカルチャーに接近する。

◆　アートの「引用」／アーティストとの「コラボ」

ポワレ（1879-1944）はフォービスムの画家デュフィ（1877-1953）等にテキスタイル・デザインを依頼することによって、ファッションとアートの「コラボ」の先鞭をつけた。サン＝ローランは抽象絵画の創始者の一人モンドリアン（1872-1944）をデザインに取り込み、マーク・ジェイコブズ（1963-）によるルイ・ヴィトンのコレクションには、草間（1929-）や村上（1962-）が関わることになる。

◆　パフォーマンス・アーツへの参画／ランウェイのパフォーマンス・アーツ化

ジバンシィ（1927-）やアライア（1940 頃-）を始めとする多くのデザイナーが、舞台や映画の衣装を制作することでアートへの参画を試みる。一方、アレキサンダー・マックィーン（1969-2010）やフセイン・チャラヤン（1970-）等によって、ランウェイそのものがパフォーマンス・アーツと化し、挑発的な主張の場となっていく。

演劇とイノベーション　情報科学部・奥田隆史

イノベーション（ Innovation ）！この言葉の本来の概念は「社会に新しい価値が生まれること」です．ところが，イノベーションと聞くと，科学技術分野の「技術革新」を思い浮かべ，「技術革新」だから理系のことだと思ってしまう人も多いかもしれません．

新しいイノベーションとして，海外では，インターネットを活用したタクシー配車アプリ「Uber」，民泊予約サイト「Airbnb」など続々と誕生しています．イノベーションを「技術革新」と狭く捉えてしまうと，これらの生み出している価値どころから，日常に存在する「コンビニ」・「宅急便」・「道の駅」の生み出した価値に気がつきません．

イノベーションを生み出す，そのイノベーションの種を育てる．それには国の規制緩和がキーになります．一方，我々，個にも自律，成長，学び，そしてイノベーションという概念を「社会に新しい価値が生まれること」と広く捉えるという意識改革が必要ではないでしょうか．

さて今年の本研究会のキーワードは「演劇」です．「演劇」を通して，「会話（conversation）」でなく「対話（dialogue）」を学ぶことができるといわれています．ここで，会話とは価値観や生活習慣なども近い親しい者同士のおしゃべりです．一方，対話とはあまり親しくない人同士の価値観や情報の交換，あるいは親しい人同士でも価値観が異なるときに起こるその摺りあわせのことです．**私は「演劇」を通して，本来の意味でのイノベーションにつながる私の意識改革をするつもりでいます．**

選書：イノベーションが必要な分野とその種・方法

- ◻ 多様な時代の新しい決め方：一致団結価値観・多数派形成からバラバラ価値観・バラバラ維持へ
- ◻ 同調と従属：「深く考える」ことをしないとひどい目に遭う
- ◻ 群れること：群れるという習性．その習性の危険さ
- ◻ あえて孤独という方法：孤独になって「深く考える」
- ◻ 運動という方法：運動により「深く考えない」から「深く考える」へ
- ◻ 芸術と科学の接点：芸術を通してあらゆる角度から科学技術の研究を深める

存在することそれ自体は、世界のうちで一箇の悲惨である。

— エマニュエル・レヴィナス『存在するとは別のしかたで』 —

宮崎 真素美（日本文化学部国語国文学科）

■排除と傷　真壁茂夫×大岡信

■「僕たちがしようとしていることは、まずそのような事柄（＊引用者注・人間の正義や尊厳にとって必要なもの）をいらないものとして認識し、身体から**捨て去ろう**とすること」
「これ以上捨てるものなどないというくらいに**捨てていく**ことからしか、演技は始まらない」
「すべてを**捨てられない**のが「生きる」ことであるという矛盾を抱えながら」　（真壁茂夫『「核」からの視点』）
■「実を言えば、純粋とは、さまざまな異質のものを**排除するところに生ずるものではなく**、逆に異質のもののすべてを貫く、組織化された一つの秩序そのもののことだ。だから純粋さは強さと一致する」　（大岡信「詩の条件」）

■「その**傷**は負の方向であったかもしれないが、もしかしたら唯一自分自身がこの世に創りあげてきた〈なにものか〉ではなかったか。捨てようとしても捨てることが出来ない、その残ってしまうそれこそが、演技の原動力であるに違いない」
（真壁茂夫『「核」からの視点』）
■「詩人独特のリズムやメタフォアは彼の独自性を確保する城壁であるが、それ故にこそぼくらはその中に入るために、まず**傷つかねばならない**のだ。ぼくらの何が**傷つけられる**のか？ぼくらの感性の体系が、である」　（大岡信「詩の条件」）

■「核」と地下　真壁茂夫×村上春樹

■「自分にとっていらないものを捨てていこうとする決意の中で、強度に意識を集中させ、すべての既成概念を無化しようという方向を向き、**身体の根底の場に下降する**ことによって、時間の感覚などが伸びたり縮んだり、歪んだりし、狂ってくる時がある」
「「核」と出会うためには、**自己の中にこそそれを見出す**ことが出来るものであると知ろうとしなければならないし、努力もしなければならない」
「**自分の身体にズレを感じ意識する**ことが必要である」　（真壁茂夫『「核」からの視点』）
■「自我レベル、地上意識レベルでのボイスの呼応というのはだいたいにおいて浅いものです。でも**一旦地下に潜って、また出てきたもの**っていうのは、一見同じように見えても、倍音の深さが違うんです。**一回無意識の層をくぐらせて出てきたマテリアル**は、前とは違うものになっている」　（川上未映子 訊く/村上春樹 語る『みみずくは黄昏に飛びたつ』）

■「闇は光の母」　谷川俊太郎

闇は光の母

闇がなければ光はなかった
闇は光の母
光がなければ眼はなかった
眼は光の子ども
眼に見えるものが隠している
眼に見えぬもの
人間は母の胎内の闇から生まれ
ふるさとの闇へと帰ってゆく
つかの間の光によって
世界の限りない美しさを知り
こころとからだにひそむ宇宙を
眼が休む夜に夢見る
いつ始まったのか私たちは
誰が始めたのかすべてを
その謎に迫ろうとして眼は
見えぬものを見るすべを探る
ダークマター
眼に見えず耳に聞こえず
しかもずっしりと伝わってくる
重々しい気配のようなもの
そこから今もなお
生まれ続けているものがある
闇は無ではない
闇は私たちを愛している
光を孕み光を育む闇の
その愛を恐れてはならない

（『詩の本』）

■感受性と傷　エマニュエル・レヴィナス

「感受性が〈傷つきうること〉、他者に曝されていること、あるいは〈語ること〉でありうるのは、それが享受であるからである」（『存在するとは別のしかたで』）